社会心理学の視点からみた「縁」

伊藤哲司

1. 大震災後の社会状況のなかで

日本では毎年、その一年の世相を表す漢字一文字が年末に日本漢字能力検定協会によって選ばれる。1995年から2010年にかけて選ばれてきた漢字は「震」「食」「倒」「毒」「末」「金」「戦」「帰」「虎」「災」「愛」「命」「偽」「変」「新」「暑」であった。ここでそれらの選定理由を詳しく解説する余裕はないが、それぞれの年に起こった象徴的な災害や事件、出来事などを多義的に表しており興味深い。

そして東日本大震災が発生した2011年の末、「今年の漢字」に選ばれたのは「絆」であった（ちなみに2012年は「金」である）。この年は、「絆」という一文字がこれほどまでにあちこちで使われるということはなかったのではないかというくらいに、この漢字に多くの人の特別な思いが込められたようである。家族との絆、友人との絆、地域の人々との絆、そしてそれまで繋がりのなかった人同士に新たに生まれた絆……。日本の総務省や外務省までもが「絆プロジェクト」という言葉を使い、震災後を生きる多くの人たちが、人と人との繋がりの大切さを省みることになったのだろう。

しかし、この漢字に深く感じ入るものがあった人たちの思いとは裏腹に、「絆」にはもともと「動物をつなぎとめる綱」という意味があり、さらに「断つのにしのびない恩愛。離れがたい情実」という含意もある（広辞苑第六版）。映画化もされたウィリアム・サマセット・モーム（William Somerset Maugham）の小説『人間の絆』の元タイトルは、*Of Human Bondage* であった。言うまでもなく英語の “bondage” には、「行動の自由の束縛」、あるいは「隷属性」といった意味があり、むしろそれは、私たちを縛りつけ拘束するものである。「絆」を「きずな」ではなく「ほだし」と読めば、そのような意味合いが、日本語としてもいっそう立ち上がってくる。

大震災が起こってしまった後に、「絆」という漢字が盛んに用いられるようになった背景には、近年の日本社会で「人間関係が希薄化」し、「地域社会が崩壊」して、それゆえに様々な社会問題があると見なされていたことへの反省があるのだろう。たしかに、とくに都市部を中心に、隣近所誰が住んでいるのかわからないといったことはけっして珍しいことではない。地域社会における人々の繋がりが薄いことは、たとえば子どもがいる世帯の子ども会への加入率が低下しているといったかたちでも現れている。ベトナムでも都市部ではそのような問題が生じつつあるのかもしれ

ないが、日本のそれのほうがはるかに進行している。

大震災の後は、被災地においても何とか生き延びた人たちが、それまで赤の他人であった人たちでもお互いに助けあい、励ましあうといったことが顕著に見られた。直接被災をしなかったたくさんの人たちがボランティアとして被災地に自ら足を運んだし、それができなくとも、義援金を寄せるなどのことを通して、被災地の人々に自分たちの思いを何とか届けようとした（むろん、ベトナムの人々が1日の給与分を寄付するという運動を展開してくれたことも、日本人の多くは知っている）。もちろん、そのこと自体は大変尊いことであったし、心強いことであったし、多くの人たちに希望を与えることでもあった。震災後に、人々がパニックを起こすこともなく、略奪行為などを起こすこともほとんどなく落ち着いてふるまっている様子――個々にはむろんいろいろなことがあったのであろうが――は、たとえばアメリカなどの海外で、日本人への賞賛というかたちで報道されていたと聞く。

ただ、大災害などの大規模な危機的状況が一度に生じた後に、人々がきわめて利他的になり、「災害ユートピア」（A Paradise Built in Hell）とも呼ばれる特別な共同体が一時的に立ち上がることが知られており、それは日本独特のことではないことには、留意しておく必要があるだろう（ソルニット、2010）。また、大災害の後には、人々が何かをしなければならないという気持ちからあちこち奔走するなど、興奮と覚醒の「ハネムーン期」があるとも言われる（ビヴァリー、1989）。そしてその時期に精神医学的に問題になるのは、人々の気持ちが極端に落ち込むこと（鬱）よりも、むしろハイになりすぎること（躁）である（安、1996）。それは、おそらく社会や文化を超えて広く見られることである。

加えて、このような特別な共同体は、長続きしないことが多いと言われる。そのときに多くの人が味わったであろう「絆」の素晴らしさを、人々が長く維持していくことは難しい。そもそも今の日本社会が「絆」をあまり感じることができないものになっていた（なっている）のは、実は、とくに都市部を中心に人々がそれを、むしろ嫌ってきたからにほかならない。それは先に述べた、肯定的な意味での「きずな」ではなく、否定的な意味での「ほだし」を断ち切っていくこと、あるいは断ち切るまでいかないとしても薄めていくことが近代化の一面であり、それはとくに都市部で顕著な現象であった。

2. 社会的動物としての人間

常に自分のプライベートな側面を近所の人たちに知られ話題にされるような地域社会、あるいは自分が人の親になっても、三世代同居でさらにその上の親たちから日常的にあれこれ言われるような生活、それらを避けるようになっていったのは、時代の流れのなかでの必然であったに違いない。とくに都市のなかでの核家族化は、同時に様々な別の種類の問題を生んだものの、多くの人々が求めた新しい生活スタ

イルであったと言っても過言ではない。

しかし、人間は「社会的動物」である。どうやっても一人だけで生きていくことは不可能である。近年ある学生が、「自分は携帯電話とコンビニさえあれば生きていける」と呟いたそうだが、その携帯電話は誰かと繋がるツールに他ならないし、多機能化したコンビニも、様々な社会的システムの一部である。「ひきこもり」で、ほとんど外部との接触を断っている若者であったとしても、少なくとも食事を運んで差し入れてくれる親などがいるからこそ、生きていくことができるわけである。

ところで筆者が専門とする社会心理学では、個人と社会との相互作用に着目する。たとえて言えば、私たち個人はみな、何らかの「お神輿」の担ぎ手である。お神輿をつくり、それをワッショイワッショイと揺らしているわけである。しかしこのお神輿は、たんに受動的に揺らされている存在ではない。それはまた、各個人の揺れ方を規定してくるのである。そのお神輿の担ぎ手である個人は、そんなに簡単にこのお神輿から離脱することはできない。そのため、お神輿の揺れ方が自分にどうも合わないと感じられても、相も変わらず意に沿わない揺れ方を続けるしかなかったりするわけである。このお神輿が「社会」である（図）。現実には私たちは、いくつものお神輿を同時に担いでいるのだろう。しかしどのようなお神輿（社会）からも外れて一人でいるということは考えがたい。そしてこの個人とお神輿（社会）の相互作用が「社会心理」であり、そのあり方に注目した人間研究が社会心理学の中心である。

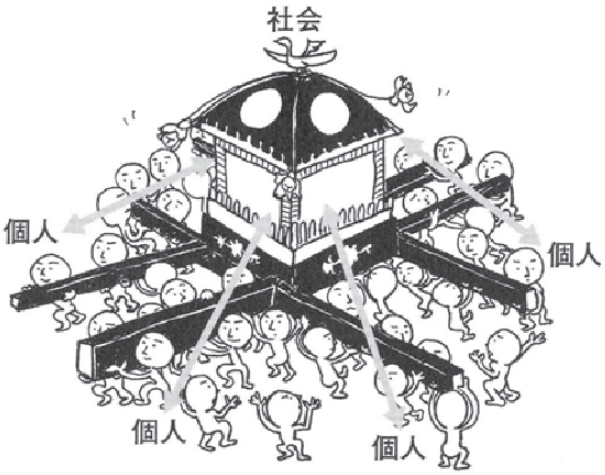

図　社会的動物としての人間

お神輿を担いでいる個人個人は、お互いにバラバラということではもちろんなく、お互いに声を掛けあったりすることもあるだろうし、お神輿の下で何らかの協力をしあったり、葛藤を感じあったりしていることだろう。たまたま近くに居合わせた個人同士が友人になったり夫婦になったりすることもある。そうなればまたそこで新たな「家族」という小さなお神輿がつくられ担がれていくのだろう。

同じ社会のなかにいても、どの個人とどの個人が出会うかは、多分に偶然の産物である。たとえ「運命の人」と出会ったと感じ、「この人とは以前から赤い糸で結ばれていた」と当人たちが考えたとしても、そのような必然性があったことを科学的に証明することはできない。「出会うまでは偶然、出会ってからは必然」と感じるのが、私たちの常なるところである。考えてみれば、親になる人が自分の子どもを選べるわけではなく、他方、子どもも親を選んで生まれてくるわけでもない。いや、そういう話を物語として大事にしていくことはありうるし、人間研究をする者としては、まさにその物語こそが大事であったりするわけだが、それもまた科学的な検証にかけられるようなことでもない。私たちは、そもそも選んでこの時代のこの社会のこの親たちのもとに生まれてきたわけではないのである。

しかし、本当は自分で選んだわけではないにもかかわらず、そうした出会い方をしたときに、私たちは「縁がある」という表現をする。それはしばしば不思議さが感じられる繋がりであり、まさに私たちの実感でもある。実際には、血縁にしても、地縁にしても、社縁にしても、私たちはそれを自分で選ぶことができないことが多い。結婚相手ですら、自分の思うように選べるわけでもない。にもかかわらず、相手との繋がりがあたかも事後に運命であるかのように感じられるもの、それが今回のテーマでもある「縁」である。

3. 心理学からみた「縁」

さて、社会心理学において「縁」はどのように扱われ研究されてきたかということを、これまでの流れを受けて解説したいところであるが、社会心理学に限らず心理学において、「縁」というキーワードには、それこそこれまでほとんど縁がなかった。『心理学事典』の類いのどれにも、筆者の知る限り心理学の専門用語として「縁」が挙げられていない。

その理由を考えてみるに、さしあたり二つのことが思い当たる。

ひとつは、英語などの西洋の言語には、「縁」に直接当たる言葉が見当たらないことである。もちろん和英辞典を見れば、「縁」に当たる英語として “chance” “tie” “relationship” “link” “knot” などが載っているが、どれひとつとっても「縁」の概念を言い当てているとは思えない。おそらく英語以外の西洋の言語も同様なのであろう。となれば、西洋の心理学で「縁」が専門用語になるわけもなく、長年にわたって輸入学問であり続けた心理学で、日本でもそれが取り上げられることがなかった

のは、当然の帰結であったのだろう。

ただ輸入学問からの脱皮ということが日本の心理学界で主張されるようになってから、少なくとも 20 年はたつ。それでもなお、「縁の心理学」が生まれていないならば、さらに他の理由もありそうである。それは、心理学が有している「暗黙の人間観」にあるのではないかと筆者は見る。

心理学では、基本的に人間は主体的に意思決定し行動できる存在であると捉えられている。そして自らの意思で何かを学びとり、発達していくことができるものとされている。もちろん何らかの要因で、そのような主体的な思考や行動が阻害されてしまうことはある。そしてさらに「病んだ心」なってしまった場合には、カウンセリングなど「心の専門家」によるケアが必要だということにもなる。しかしそれでも、この人間の主体性については、基本的に疑問が差し挟まれることはないのが心理学の「暗黙の人間観」である。もちろんこれは、心理学が西洋発の学問であることに由来しているであろう。

しかし現実の人間はどうかと言えば、そのような自分の「生き方」を選び取れるばかりの存在では、どうやらなさそうだ。冤罪事件に巻き込まれ、やむにやまれぬ「自白」に追い込まれた人々の供述の分析等に関わってきた発達心理学者の浜田寿美男さんは、「生き方」という主体性が色濃く感じられる言葉に違和感を覚え、人は与えられた条件をどうにか引き受けて「生きるかたち」を成形していると述べる。浜田さんは、心理学の捉え直し、語り直しを試みた筆者との往復書簡のなかで、既存の心理学を批判し、「もうひとつの心理学」が必要であると述べている（浜田・伊藤、2010）。

そのような人間の主体性を必ずしも前提としない「もうひとつの心理学」がかたちをなしていったときには、「縁」もまた心理学の重要な専門用語のひとつとして扱われるようになっていくのかもしれない。

4. 再び、大震災後の社会状況のなかで

「絆」という言葉の裏側にはりついた否定的な意味合いに比べれば、「縁」はもっとまろやかで、ソフトな無理のない概念であるように思われる。人は、もともとは単なる偶然にすぎないであろう人との繋がりができたときに「縁がありますね」と口にしたりする。中国語由来と思われるこの言葉は、同じ漢字文化圏である韓国／朝鮮にもあるだろうし、私自身が主な研究フィールドとしてきたベトナムにもある。現在のベトナム語は漢字をまったく使わなくなっているが、ベトナム語の約 7 割はなお漢字で書けると言われる。“duyen”（発音は「ズエン」）とアルファベットで表記されるベトナム語の「縁」。日本語の「縁がある」とほぼ同じニュアンスで、“co duyen” と表現される。

ただし、結果としてできた「縁」がすべて良きものとは限らないのは、「縁を切

りたい」といった表現があることから容易に理解できる。それは、いったん夫婦となったカップルなどの「縁」に限らず、たとえば「血縁」と呼ばれる血の繋がった家族・親戚との関係を断ちたいということもありうる。江戸時代に夫と離別したい妻が駆け込んだという縁切寺の存在は、縁を切ることの難しさを物語るものであるし、現在では縁を切ることの手助けをする「別れさせ屋」というビジネスまで成立しているようである。恋人と別れる、夫婦が離婚するといったことが、様々な禍根を残すことになるのは、時代を超えて普遍的なことなのだろう。

しかし私たちは社会的動物である。誰かと繋がり、時に葛藤を覚えたとしても、互いに支えあうなかでしか生きていくことができない。そのかたちを、自分が主体的にすべてコントロールして築いていけるというのは幻想で、そのように自分の人生を自分の意思に沿ってすべて組み立てていくことはほとんど不可能である。にもかかわらず、何とかそこであがきつつ、とくに震災後は、そうした自分の周囲の人たちとの縁を見直していきたい、できれば少し良きものに変えていきたいという動きが、あちこちで起こっているようである。

今や欠かせないもののひとつになったインターネットが果たしている役割も見逃せない。なかでもSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）と総称されるツイッターやフェイスブックなどは、プライバシーが必ずしも守られないとか、匿名性ゆえの暴力的な言動がまかり通るといった問題を孕みつつ、これまでにない人と人との繋がりを紡ぎだしている。筆者も、大震災後にこれらを使い始めたのであるが、とくにフェイスブックは、身近な人たちとあらためて繋がることができる――たとえばゼミ生とのやりとりでも利用している――のみならず、もう長年会っていない旧友と再び繋がり、あるいは地理的に離れて普段はほとんど会う機会がつくれない知人との繋がりをつくってくれるツールとして、大変重宝している。そして実際そこから、旧友とあることを始めるといった、このツールがなければできなかったであろうことが、筆者のまわりでも動き始めている。

大震災とそれに続く原発事故を経験して、国や自治体、専門家などが単純には信頼されなくなったと言われる。原子力政策が「安全」を保障していないことが明らかになった現在、その「安全」は「神話」であったと言われるわけである。もはや「安全」は、外部から与えられるものではなく、私たちのなかから紡ぎだしていかねばならないものとなった。そこでは絶対的な「安全」はないし、ゆえにすっかり「安心」してしまうわけにもいかない。しかし不安を内包しつつ、それを少し上回る「安心」を得ていくために、私たちは一市民として、縁ある人々と時に強固に、時に緩やかに繋がりながら生きていくしかないのだろう。

平安時代の書物『成唯識論 述 記（じょうゆいしきろんじゅつき）』に出てくる「安危共同（あんぎぐどう）」という言葉があるという。安心と不安を同時に受け止め、それらが共同である実態を見抜けという教えである。安心と不安は表裏一体のものであるということであろう。縁ある人との有意味な関係こそが、この時代にあって不安をぬぐいきれないにもかかわらず、わず

かにでも上回る安心を得られる源なのではなかろうか。

【付記】本稿は、2012 年 8 月 30 日～ 9 月 1 日に東京電機大学で行われた第 14 回日本感性工学会大会で発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

引用文献

安克昌　1996 『心の傷を癒すということ――神戸…365 日』作品社

浜田寿美男･伊藤哲司　2010 『「渦中」の心理学へ――往復書簡･心理学を語りなおす』新曜社

ソルニット、レベッカ　2010 『災害ユートピア――なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房

ビヴァリー、ラファエル　1989 『災害の襲うとき』みすず書房